中国空軍 H-6K 型戦略爆撃機の配備数増加

漢和防務評論 20150703（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

中国空軍が CJ-10 型空中発射巡航ミサイルを開発したことによって、旧式爆撃機 H-6（旧ソ連の TU-16 爆撃機）の利用価値が出てきました。 CJ-10 は核弾頭型と通常弾頭型があります。中国空軍は CJ-10 を搭載する H-6K 型の配備基地を核兵器貯蔵用に基地施設を改修中です。 中国空軍は、最近 H-6K を西太平洋に進出させ長距離機動訓練を行い、これを公表しました。この訓練は米国のグアム島に対する攻撃訓練と見られています。H-6K に搭載された CJ-10 ミサイルは、中国領空から発射しても日本全域に到達するものと見られています。

KDR 平可夫特電：

西安航空機公司が 2014 年に追加生産した H-6K 爆撃機は、3 個ある爆撃機師団中の各連隊に配分された可能性が高い。同公司は、2014 年に 6 個の懸架装置を有する H-6 を少なくとも 14 機生産した。この 3 月、中国空軍は、爆撃機部隊が初めて西太平洋に進出し長距離機動演習を行ったことを公表した。公表された写真は H-6K 型であった。

この演習は、CJ-10（長剣-10 型）空中発射巡航ミサイルを使用した米国グアム島攻撃の訓練である可能性が極めて高い。中国の第一列島線からグアム島までの距離は 2200 乃至 2500 KM ある。これは、H-6K 搭載ミサイルでグアム島を攻撃するためには、中国沿岸から 1000 KM 程度離れる必要があることを意味する。実戦においては、このような攻撃は現実的でない。なぜなら H-6K は、亜音速でステルス性が無く、中国戦闘機による絶対的な制空権が確保できなければ、第一列島線で米国を攻撃することはできないからだ。

沖縄に駐屯する強大な米国空軍は F-22 ステルス戦闘機を巡回訓練させている。注意すべきことは、H-6K、CJ-10 の日本に対する脅威が増加していることであり、中国領空から北海道を含む全ての日本領土が攻撃できる。現在、3 個爆撃機師団は、少数の H-6K を受領している。航空兵第 36 師団の H-6K は、習近平の視察を受け、また内部写真を公開した。アビオニクスも大規模に改修されたようである。少なくとも新たに 4 個以上のマルチモード・ディスプレイを導入しているようだ。乗員は 3 名に減らした。中国は H-6K の就役の場面を公開した。機体には大量の電子偵察、電子妨害アンテナ、レーダー警報受信機、衛星通信アンテナ、データリンク・アンテナがあった。レーダーは明らかに新型だ。

このような装置は、戦略爆撃機としての機能であり、必要時、最高統帥部の直接指揮を受けることが出来る。この点は容易に理解できる。なぜなら CJ-10 巡航ミサイ

ルは核弾頭／通常弾頭兼用であるからだ。したがって H-6K の出現は、中国の核戦力が真に三位一体の時代に入ったことを意味する。
もし KDR の判断が正しければ、3 個爆撃機師団の少数の H-6K は、核弾頭型の CJ-10 を搭載できる。したがって各爆撃機師団の基地は全て（核兵器用に）改修中である。
南京で H-6K が発見された。これは爆撃機第 10 師団の部隊である。第 8 爆撃機師団は南シナ海を担当し、同時に台湾に対処する。予想通り H-6K に換装中である。
長距離巡航ミサイルが開発されたことによって、旧世代の亜音速爆撃機が改修され、継続して就役する余地がでてきた。B-52、TU-95SM 型機もさらに 20 年以上継続就役する可能性がある。
H-6K が継続生産されると言うことは、中国の新時代の爆撃機開発計画があまり進展していないことを意味する。今のところ新時代の爆撃機開発計画が設計図段階で留まっているので今後 20 年間は H-6K の天下が続くであろう。

以上